



第4回 子ども学会議にかけた思い

安藤寿康 (第4回子ども学会議大会推進委員長／慶應義塾大学文学部教授)



第4回子ども学会議は「子ども・進化・脳科学」をタイトルに、2007年9月15日、16日の両日、慶應義塾大学三田キャンパスで開催された

この特集(5p～25p)は一昨年に行われた「第4回子ども学会議」にご登壇いただいた先生方に寄稿いただき、あるいは講演の採録をお願いして構成したものである。

2007年度に慶應義塾大学で開催された第4回子ども学会議のテーマは「子ども・進化・脳科学——生命の科学と子ども学」であった。それまでの過去3回のテーマは「メディア社会と子ども学」「多文化社会とこどもたち」「子ども学の未来」と、いずれも子どもや子ども学を取り巻く社会に文化的状況に焦点を当てたものであり、また昨年度は「いじめ」という、これも重要な社会現象であった。しかしながら私が運営委員としてこの学会に関わり、この大会をお引き受けすることを決めた最初から、「生命現象としての子ども」に焦点を当てた大会にしよう、というより、せねばならない、という使命感を感じていた。

「子ども学」はその創立者である小林登先生の理念のとおり、その間口と射程がきわめて広く、子どもに関わるさまざまな視点を既存の学問の縦割りの枠ではなく、子どもという視点から統合的に見ることでできる場をつくらうというものである。特に「生物として生まれ、社会の中で育つ」存在として子どもを「科学的に」見ようという立場が強調されており、行動遺伝学を方法論として教育心理学に携わってきたものとして、それに強い共感を感じながらこの学会の設立から関わってきたからである。

「生物としての子ども」という見方は、子どもを見る時の見方として必ずしも一般的ではない。子どもはまずかわいく、愛らしく、いとoshii存在であり、そして社会の中でよりよい子どもとして育ててもらいたいという教育の対象としての存在がまずある。つまり、私たちの子どもに対する「熱い思い」でもって子どもを物語ろうとする姿勢が自ずと入ってきてしまう。だ

がその思いを心に抱きつつも、科学者として対象に、そこにある現象に何が起きているのかを冷静にながめ、報告し、それ自体の意味を考え直すという視点がとても重要なのではないかと。

その時、生命科学の最新の展開というものは、そのための有益な手がかりを与えてくれる。生命科学がカバーする領域は広いが、この会議で特に注目したのは進化という視点と脳科学の視点、そしてキーワードとしてはテーマにあげなかったが、それらをつなぐ遺伝子の視点である。言うまでもなくダーウィンの築き上げた進化という考え方は現代生命科学のグランドセオリーであり、またfMRIや光トポグラフィーといった脳画像研究でその発達がめざましい脳神経科学の領域は、最も注目される科学領域の一つだろう。そして進化という生命の歴史を担っているのが遺伝子であり、それが脳というたぐいまれなる生命の器官を生み出すわけである。そして今世紀初頭、DNAの塩基配列をすべて読み解くヒトゲノム計画が終了し、遺伝子研究のためのスタートラインが切って落とされた。

西洋史はキリストの誕生を境にBefore Christ(キリスト以前)とAnno Domini(神の御年)に分け、それぞれをB.C.とA.D.というが、時代はまさに新しいB.C.とA.D.の境目を経験している。Before Chromosome(染色体以前)とAnno DNA(DNAの御年)である。それだけ大きな生命認識の変革点にあるといえるだろう(われわれはもう一つBefore ComputerとAnno Digitalの時代の境も経験しつつある)。こうした生命としての人間を科学的に読み解く道具立てが出揃った今日、そこから「子ども」というものがどのように見えてくるのかを一瞬してみたい。それが研究者としての私の子ども学に抱いた野望であり、願望であったのである。